
 学 会 記 事

第 22 回新潟内視鏡外科研究会

日 時 平成 25 年 7 月 13 日 (土)
午後 1 時 45 分～
会 場 万代シルバーホテル 万代の間
(5 階)

I. 一 般 演 題

1 当科における Total Laparoscopic Hysterectomy (TLH) の問題点と対策

関根 正幸・杉野健太郎・森 裕太郎
水野 泉・鈴木 美奈・安田 雅子
遠間 浩・安達 茂実

長岡赤十字病院産婦人科

Total Laparoscopic Hysterectomy (TLH) では子宮の十分な伸展操作が必要であり、子宮マニピュレーターは欠かすことのできない器具である。しかしながら子宮マニピュレーターをいかに操作しても子宮周囲の視野が得られず難渋する症例がある。最近当科では、VCARE® (Vaginal-Cervical Ahluwalia Retractor-Elevator: CON-MED 社) と直針付きナイロン糸を用いて、子宮の伸展と視野の確保を行っておりその成績を報告する。TLH 症例は 12 例で、うち従来の方法 5 例、直針ナイロンが 3 例、VCARE®は 4 例であった。直針ナイロン糸 (松田医科工業) は 60mm の丸直針、80cm の 2-0 糸で、腹壁より刺しし腹腔鏡鉗子操作で子宮底部筋層に貫通させ、左右の臍下側腹部に結紮固定し子宮側方の視野を得て上部靱帯および基靱帯上部の処理を行う。経腔操作・第二助手を必要とせず、約 700 円と非常に安価である。VCARE®はマニピュレーターと腔パイプ両者の機能を併せ持っており後脛壁を切開す

る時の視野確保に優れ、約 15,000 円と従来に比べ安価である。直針ナイロン、VCARE®を使用した 7 例では、手術時間 2 時間 30 分以内で出血量も少なく概ね良好な操作性が得られていると考えているが、実際に使用した現場での問題点を含めてその有用性を検討したい。

2 腹腔鏡下大腸癌手術症例における DVT の検討

佐藤 洋・丸山 聡・瀧井 康公
會澤 雅樹・松木 淳・野村 達也
中川 悟・藪崎 裕・土屋 嘉昭
梨本 篤

県立がんセンター新潟病院消化器外科

【目的】腹腔鏡手術症例における術後 DVT の頻度およびリスク因子について検討した。

【対象と方法】2009 年 6 月から 2013 年 4 月までに当院で腹腔鏡下手術を施行した大腸癌症例のうち、術後下肢エコー検査を施行した 264 例を主たる対象として DVT 有無および臨床病理学的因子について検討した。

【結果】抗凝固療法未施行 220 例では、DVT 発生は 33 例 15.0% (同時期の開腹手術 79/387; 20.4%: $p = 0.103$) であった。なお DVT は全症例で無症候性であり、術後肺塞栓の発症はみられなかった。

危険因子については、DVT 発症症例は男女比 10:23 ($p = 0.022$)、術前・術後 D ダイマーが高値 (術前 1.5 ± 3.2 vs 0.7 ± 0.6 : $p = 0.006$; 術後 8.0 ± 2.1 vs 5.2 ± 3.5 : $p = 0.001$) で、有意差を認めた。年齢、BMI、手術時間、局在、Stage、CEA、CA19-9、術前 CRP、ドレーン留置および抜去時期、経口開始時期、術後在院日数などでは有意差を認めなかった。

【結語】腹腔鏡手術における DVT 発生率は開腹手術と有意差を認めなかった。危険因子は女性および術前・術後 D ダイマー高値であり、術後抗凝固療法適応決定の一助になる可能性がある。